

謹賀新年



天満宮

題字／後西天皇御宸筆

特集

- ◆ 天神さまと私 — 表千家不審菴 千宗左 家元
- ◆ 天正の「北野大茶湯」の縁を今に伝える 献茶祭、厳かに斎行
- ◆ 天正年間に開催された空前絶後の大茶会
「北野大茶湯」の舞台となった北野の地を会場に繰り広げられた
伝統文化とアート・食・音楽の融合する祭典

KYOTO NIPPON FESTIVAL 開催

北野天満宮社報 新年号 Vol.17

KITANO TENMANGU NEWS

日本文化の中心地 京都
その文化の礎を築いた天神信仰発祥の社

北野天満宮の由緒

当宮は御祭神に菅原道真公（菅公）をお祀りした全国天満宮・天神社一万二千社の宗祀（総本社）の神社です。

天神信仰発祥の社として今から千年余り前の村上天皇天曆元年（九四七）六月九日、御神託により平安京の天門にあたる北野に御鎮座致しました。天徳三年（九五九）右大臣藤原師輔卿が御社殿を造営、一條天皇により北野祭は官祭に与り、「北野天満大自在天神」の神号を賜り、さらに皇室・朝廷の崇敬を受け二十二社に加えられ、臣下として初めて官幣中社に列格、皇城鎮護の神として崇められるとともに、天満宮・天神社の総本社として崇敬されてきました。

創建以来、御皇室との御縁深く、寛弘元年（一〇〇四）には一條天皇がはじめて北野社に行幸されました。以来歴代天皇の行幸も二十数度に亘り、さらに將軍家や有力大名の崇敬を受けました。菅公薨去延喜三年（九〇三）より凡そ百年の歳月をかけて誕生した北野の天神信仰は、平安京の天門にあつて、朝野を問わず人々の暮らしの最も重要な指針となり今日まで育まれてきたのです。

「文道大祖 風月本主」と崇められた菅公は、和魂漢才の精神で誠の心を以って学問に勤しまれたことから、学問をはじめ芸能・農耕・厄除け・至誠・冤罪を晴らす神として奉祀されるとともに、人々の心の支えとなる神として、各時代の社会構造と相まって篤い崇敬をうけ、庶民に至るまで「天神様」として親しまれてきました。菅公は、学者・政治家また詩人・教育者として多方面に活躍され、生涯一貫された「誠の心」は、日本人の感性として現在にも生き続けています。

千有余年に亘る歴史の中で受け継がれてきた天神信仰の根本を示すのが、当宮所蔵の国宝「北野天神縁起絵巻」承久本です。数ある縁起絵巻の中で唯一無二の神社絵巻物であり、その信仰性や描かれる世界観、美術的価値は世界が認めるところであります。

また現在の御社殿は、豊臣秀吉公の遺命により豊臣秀頼公が片桐且元を奉行として、慶長十二年（一六〇七）に造営された一大建築群です。御本殿は八棟造と称され、国宝の指定を受け、桃山文化の代表として、その絢爛豪華さは謂うまでもありませんが、特に多数の桃山建築中でその創建当時の規模そのままに保存されているのは当宮が唯一のもので、後世の権現造の原型となるなど、神社建築史に多大な影響を与えています。

菅公の御神霊を祀る北野天満宮は、御墓所・太宰府天満宮と共に全国天満宮の宗祀と称され、日本文化の礎、学問の神様として今日も多くの参詣者が訪れています。



【シンボルマーク】

平安京の天門に位置する北極星を星梅鉢と鳥居（北野）で捉えたマーク
（平安京については裏面参考）

表紙写真 「北野追儼式」 斎行 —平安京の天門に座す「北野天満宮」—

北野の地は、平安京の北西（乾の方角）「天門」に位置し、古来より天神地祇の神々を祀る聖地である。京都では節分の日に北野天満宮を含む四社寺を「四方詣り」と称して参詣し、無病息災、招福を願う習慣が伝わるが、中でも北西の北野は、四方詣りの最重要地とされ、毎年『北野追儼式』と称する節分行事を厳粛に執り行い、皇城鎮護の中核を担う社として信仰されている。

謹賀新年

新春を壽ぎ、謹んで聖壽の御安泰、皇室の弥栄と国家の隆昌を心よりご祈念申し上げます。皆様には、旧年中当宮の諸事につき、種々ご高配に与りましたこと、厚く御礼申し上げますと共に、本年も相変わりをませずご厚情の程お願い申し上げます。

扱、旧臘一日豊太閤が天正十五年旧曆十月一日に、千利休・今井宗久・津田宗及居士らと催した歴史上名高い空前絶後の大茶会「北野大茶湯」の故事を今に伝える献茶祭を、四家元・二宗匠輪番の中、昨年は表千家千宗員若宗匠御奉仕久田家半床庵御当番により御神前で献茶の後、境内一円で盛儀の内に斎行致しました。

それに先立ち十一月三日には、天満宮講社会長裏千家千玄室大宗匠ご参列のもと、講社大祭が執り行われ、紅梅殿船出の庭にて二年目となる菅公顕彰「曲水の宴」を執り行いました。この曲水の宴は北野独自の和漢朗詠と白拍子舞を披露し、平安の昔を偲ばせる風雅な一時を再興しております。今後一層京都の風物詩として定着すれば幸いです。

昨年は歴史ある神事、旧儀の復興による祭儀の厳修に努めました。八月には御手洗神事「北野七夕祭」、十月二十一日から十二月三日までは、日本文化と音楽・食を融合させた「京都日本フェスティバル」を執り行い、多くの参拝者が訪れました。整備された史跡御土居のみみじ苑は、展望舞台からの御本殿の眺望や紅梅殿船出の庭も彩を添え、京都のみみじの名所として声望を集め、年々賑わいを増しております。

延暦十三年、桓武天皇が四海平安の祈りを込め建設された平安京より千二百年に及ぶ文化の都。京都は、日本文化の礎となっております。平安遷都より五十年後に顕現された菅原道真公（菅公）の御神霊は、四神相応の平安京の最も重要な乾（北西）の天門、天神地祇の神々を祀る聖地北野に祀られ、北野天満宮が創建されました。「文道大祖 風月本主」と称えられた菅公の「和魂漢才」の精神は、日本の近代化に寄与したばかりではなく、世界に類のない我が国の高度な文化を育んだ礎として、時代の変遷とともに全国に伝播した北野の天神信仰が大きく関与しています。

このような天神様の御神徳を仰ぎ、愈々本年は菅公の御神慮をお慰めする千百二十五年半萬燈祭斎行まであと十年という節目の年となりました。御本殿をはじめとする境内各所の整備事業を中心に、文化事業・奉祝事業等々の諸計画を、関係機関の指導を仰ぎ、職員一同誠心誠意取り組み、ご尽力でいく所存でございます。半萬燈祭の盛儀は、天満宮講社・氏子崇敬者各位の赤誠なるご尽力なしでは成し得ないことであり、今後とも皆様方のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

未筆乍ら、年頭に当たり本年一年皆様のご多幸ご健勝をお祈り申し上げます。



千支（戌）絵馬（日展特別会員 三輪晃久画伯作画）



平成三十一年戊戌年元旦

北野天満宮

宮司

橘

重十九

職員

巫女

出仕

参事
権禰宜

名譽宮司
宮司
権宮司
禰宜

宮本美里	川崎純平	本郷晃司	大坂屋摩也	木村綾	一色紗里	伊藤友香	田淵咲弥	山本茜	米川安世	威徳寺秀洸	篠原亮太郎	河合善多郎	川村亮滋	上嶋将司	湯浅和雅	田中副央	白江秀宜	東川楠彦	黒木崇史	松大路和弘	玉井清文	小竹史浩	中野忠雄	加藤晃靖	嶋田貴績	堀川宏史	内藤洋	神原孝至	松吉真幸	梶道嗣	加藤迪夫	橘重十九	名譽宮司
------	------	------	-------	-----	------	------	------	-----	------	-------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	-----	------	------	------



天神さまと私

千宗左

千宗左（せんそうさ）
表千家十四代家元。昭和十三年生まれ。中央大学文学部卒業。昭和四十二年、大徳寺管長の方谷浩明（ほうこく）老師より而妙齋（にせうしやう）の齋号を授かり、宗員を襲名。昭和五十五年、十四代宗左を襲名。一般財団法人不審菴理事長、一般社団法人表千家同門会名誉会長。



而妙齋宗匠 北野天満宮献茶祭（平成25年）



北野大茶湯之址石碑

北野大茶湯



新年あけましておめでとうございます。
北野さんのお正月は、今年も沢山の初詣の方々にぎわいを見せています。皆様にとりまして、今年一年が健やかな年でありますことをお祈り申し上げます。

私たちが「北野の天神さん」として親しんでいる北野天満宮は、茶の湯とゆかりの深い神社としても知られています。私も北野さんを訪れるたびに、お茶の気分がただようお社であることを強く感じます。

北野天満宮と茶の湯の関わりということでもまず思い浮かぶのは、豊臣秀吉公の「北野大茶湯」です。

この大茶会は、安土桃山時代、千利休居士が秀吉公の御茶堂（おきどう）をつとめていた天正十五年（一五八七）十月一日におこなわれました。今から四百三十年前のことです。この茶会に先だって、京都の市中には高札が掲げられ、茶の湯に執心する者は身分の別なく、たとえ外国の者であっても参加するように呼びかけられました。

当日は、北野天満宮の森に八百ヶ所にもおよぶ茶席が設けられ、それぞれに趣向がこらされたといえます。この茶会に参加した人は籤をひいて、一番は秀吉公、二番は利休、三番は津田宗及、四番は今井宗久が点てたお茶をのむことができました。また、拝殿には秀吉公の黄金の茶室がしつらえられ、多くの茶の湯の名物道具が飾られたようです。そして秀吉公も自ら茶席を見てまわり、気に入ったおもしろい趣向の茶席でお茶をのんだという話も伝わっています。

この茶会で利休が用いたといわれる長次郎作の黒茶碗は、それ以後「北野黒」と呼ばれて現在に伝わっています。また、お公家さんの烏丸家がこの茶会に出した茶入を秀吉公がたいへん誉めたため、この茶入は「北野肩衝（かたつき）」という銘がついて伝えられています。

利休は、この大茶湯に準備の段階からたいへん力を尽くしたようです。北野大茶湯は、それまでにない大規



北野大茶湯図 浮田一蕙筆

模な茶会で、茶の湯の歴史に名をとどめています。これによって北野天満宮は茶の湯と縁の深い神社となりました。

今も境内には「北野大茶湯之址」と刻まれた大きな石碑が建てられ、秀吉公ゆかりの井戸の址もあり、往時をしのばせています。

菅原道真公と利休

秀吉公の御茶堂として、名実ともに天下一の茶人となり、秀吉公の茶の湯を支えてきた利休でしたが、天正十九年（一五九一）二月二十八日に自刃して七十年の生涯を閉じました。その三日前の二月二十五日、利休は辞世（遺偈）をしたためています。それは「人生七十力圓希咄 吾這宝劔 祖仏共殺 提ル我得具足の 一太刀 今此時ぞ天に抛つ」という四言四句の偈と一首の歌からなり、最後に「天正十九年仲春廿五日 利休宗易居士（花押）」と記しています。この辞世から、禅の悟りの境地に至り、死を覚悟した利休の心を感じます。

利休の辞世は、五十年ごとの居士の遠忌の茶事の時にしか出されることはありません。とくに門外不出として家元に伝えられました。

また、このほかに利休が詠んだ次のような辞世の狂歌も伝わっています。

利休めはとかくみやうがのものぞかし

かんせうじやうになるぞとおもへば

自分は「みやうがのもの」（冥加の者、果報者）ではないか。「かんせうじやう」（管丞相）のようになると思えば、といった意に解されます。管丞相は道真公のことです。利休は、自らの境遇を不慮の最期を遂げた道真公になぞらえ、自分も死によって道真公のようになれるかもしれない、と詠じたのでしょう。利休は道真公を深く慕っていたことがわかります。この狂歌がいつ詠まれたものかは明らかではありませんが、道真公の祥月命日にあたる二月二十五日も考えられます。

歴代家元と天神さん信仰

利休が北野大茶湯に深く関わり、また道真公を崇敬していたこともあり、その後も表千家の歴代家元は北野天満宮とのご縁を大切にしてきました。

六代の覚々斎は茶の湯の熟練と詩文の上達を願い、天神さんを篤く信仰したと伝えられます。十六歳の時に「天下梅花主」という一行物をしたためています。この句は、道真公が詩の神とよぶべき渡唐天神として崇められた説話から生まれましたが、まさに覚々斎は天下梅花の主に道真公の姿をみて、この一行を書いたのでしょう。

また、表千家中興の祖、七代の如心斎も、天神さんへの信仰がたいへん篤かったようです。如心斎は、江戸時代中頃の享保十九年（一七三四）、北野天満宮の社殿修復の費用を寄進するため、自ら三十本の茶杓を削りました。この茶杓は「北野三十本」と呼ばれて広く知られるところとなり、如心斎ゆかりの道具として大切に伝えられてきました。如心斎は一本ずつ茶杓の筒に銘を書付けましたが、家元には如心斎自らが三十本の茶杓の



而妙齋作茶杓 銘 梅花 北野三十本の内



碌々齋作茶杓 銘 松・梅 北野三十本の内



如心齋作茶杓 銘 大和錦 北野三十本の内

銘を控えた文書も伝わっています。

三十本の銘は道真公にまつわる故事や和歌から付けられたと思われます。たとえば「飛梅」という銘があります。これは、道真公が太宰府に赴くことになって京都の邸宅を離れるとき、梅の木に向かって「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」と詠んだところ、道真公を慕った梅の木は太宰府に飛び、その邸宅の庭に根付いて花を咲かせたという有名な故事によるのでしょう。また「手向山」という銘は『古今集』にある道真公の「このたびは幣もとりあえず手向山紅葉の錦神のまにまに」という歌から付けられたと思われます。ちなみに、表千家にある茶杓には「大和錦」という銘がついています。

北野三十本の茶杓は如心齋以後も削られました。十一代の碌々齋をはじめ、祖父の十二代惺齋、父の十三代即中齋、そして私も削っています。

北野天満宮での献茶

こうしたご縁のなかで大切な出来事があります。明治十三年（一八八〇）一月十三日、十一代の碌々齋によって、道真公の御神前にお茶を献じる献茶式がおこなわれたことです。こんにち全国の社寺でおこなわれている献茶式のはじまりです。

北野天満宮での献茶は、これより二年前の明治十一年（一八七八）十二月、藪内家によっておこなわれていましたが、そのあとを引き継いだ明治十三年の碌々齋の献茶は、はじめて北野天満宮の行事として認可されたものでした。やがて三千家と藪内家が交替で献茶を奉仕するのが恒例となり、大正の末からは久田家、堀内家も加えられ、毎年十二月一日におこなわれています。私も家元を襲名してから北野さんの献茶を奉仕してきました。

茶の湯はながい歴史のなかでさまざまな時代に直面してきました。なかでも明治の文明開化によって日本の伝統的な文化が顧みられなくなるなか、茶の湯も衰退を余儀なくされました。しかし、多くの人がどの努力によって苦難の時代をのりこえ、こんにちまで継承されてきたのです。明治十三年の献茶は、明治以後、表千家を支えた大阪の実業家と美術商の集まりである「共香社」という有志の後援によるものでした。

家元には、その時の献茶の祝詞が、碌々齋の好み表具で掛物に仕立てられ伝わっています。また、この献茶で用いられた茶道具一式は北野天満宮に大切に保管されています。平成二十一年、碌々齋の百年忌をむかえ、表千家北山会館においてゆかりの茶道具展を開催した時、この献茶道具一式も北野天満宮から拝借して展示し、多くの皆さんにご覧いただきました。

さきにふれましたが、碌々齋の北野三十本の茶杓はこの献茶を記念してつくられています。三十本の銘のうち十二本は如心齋と同じ銘ですが、そのほかは碌々齋が新たに銘をつけています。

喜寿をむかえて

さて話は変わりますが、私は平成二十六年に喜寿をむかえました。そして翌二十七年二月、ちょうど家元の梅がほころぶ頃から翌年三月にかけて、炉の時節を選び、自祝の茶事を二十七会ほど催し、日ごろからおつき



茶弁当



北野神社初献茶祝詞 碌々斎好表具

襲名と隠居

最後になりますが、今年の二月、私は家元を猶有斎宗員に譲って隠居することといたしました。利休居士の命日にあたる二月二十八日、居士を祀る家元の祖堂において襲名の儀が執りおこなわれ、秋には全国の同門会の皆さんが祝賀茶会を催してくださいます。私は数年前から、八十歳になったら代を譲って隠居することを考えていたのですが、いよいよその運びになった次第です。

歴代のなかで隠居して代を譲ったのは三代元伯宗旦、八代啐啄斎、十代吸江斎、十一代碌々斎の四人です。なかでも啐啄斎はわずか八歳で父の如心斎を亡くし、すぐに家元を継ぎました。そして還暦をむかえたのを機に九代の了々斎に代を譲り、みずからは隠居して名を宗旦とあらためました。宗旦は八十歳まで長生きした三代元伯の名ですが、啐啄斎は隠居名として宗旦を名のったのです。以後、啐啄斎にならい吸江斎、碌々斎も隠居してから宗旦を名のっています。私も同じく隠居した後は宗旦を名のることになります。

ふりかえってみますと、昭和五十四年八月二十九日に父即中斎が亡くなり、私は翌五十五年二月二十八日に家元を襲名しました。それから四十年にわたり家元をつとめてきました。これからは猶有斎を見守りながら、お茶を楽しみ、力を尽くしていく所存です。

末筆ながら、年頭にあたり、利休の時代からはじまる北野天満宮との深いご縁が今後も末永く続いてゆくことを切に願っております。

あいのある方々、またお世話になっている方々をお招きしました。
私がこれまでおこなってきた主な茶事は、私の宗員号の襲名（昭和四十四年）、家元襲名（昭和五十五年）、利休居士四百年忌追善（平成二年）、私の還暦と猶有斎宗員襲名（平成十年）でしたから、喜寿の自祝の茶事をおこなうのは十七、八年ぶりでした。このところ久しく茶事をしていませんでしたので、入塾してから一度も家元での茶事を経験したことのない若い内弟子も多くいます。いつも茶事をおこなう前は、職家（千家十職）の皆さんを招いて習礼をおこなうのですが、このたびは、この習礼より前に内弟子を客にむかえての習試習礼をもって茶事をはじめることになりました。

茶事にお招きした方には、まず小間の不審庵で濃茶をさしあげました。そのあと、広間の残月亭に席を移し、懷石を召しあげていただき、最後に薄茶をさしあげました。不審庵の床には、利休の孫で三代の元伯宗旦が七十七歳の時にしたためた「不審庵の詩」という掛物をかけました。これには元伯が七十七歳をむかえた時の心境とお茶への思いが短く綴られており、最後に「不審主七十七」と記されています。私の喜寿の自祝の茶事には申し分のない掛物で、私は元伯の心境に思いをいたしながら、不審庵の床にこの掛物を掛けたのです。今回は少し気楽な自祝の茶事ということもあって、私は楽しみながら道具組や懷石の献立を考えました。

この茶事には、皆さん気楽にお越しただいて、お茶を召しあげていただきたいと強く願っていました。お招きした方々と過ごした一刻は心に残るものとなり、ほんとうに嬉しく思った次第です。

この茶事が終わってから、三月中旬には大寄せの跡見の茶会をおこない、秋には北山会館の特別展において茶事で用いた道具を茶事の流れにそって展示し、多くの方々にご覧いただきました。

天正の「北野大茶湯」の縁を今に伝える 献茶祭、厳かに齋行

「北野大茶湯」の縁を今に伝える献茶祭を十二月一日午前十時から本殿において厳かに齋行した。社務所始め境内には幾つもの茶席が設けられ、一服を楽しむ門人・愛好家で終日賑わいを見せた。

「北野大茶湯」とは

この献茶祭の基になっている「北野大茶湯」は、天正十五年（一五八七）の旧暦十月一日、豊臣秀吉公が当宮境内において千利休・津田宗及・今井宗久居士らとともに亭主をつとめて開いた茶会で、『広辞苑』にも一項目立てられるほどの大茶会だった。「茶好きの者は、町人・百姓・唐人に至るまで参加せよ」との高札が立てられ、当宮拝殿には名器の数々が展覧され、北野の森には八百もの茶席が並んだ、といわれるほどの大規模なものだった。楼門前中ノ森広場には、大茶湯で水を汲んだと伝わる「太閤井戸」が現存し、一の鳥居西側の茶室・松向軒内には細川三斎公が使った井戸「三斎井戸」が、上七軒西方尼寺には千利休居士が用いた「利休井戸」が残るなど、天正の「北野大茶湯」の名残を伝える遺跡が各所にある。明治十九年には大茶湯三百年記念献茶式が、また昭和十一年には三百五十年記念の「昭和の大茶湯」が五日間にわたって開催されており、明月舎・松向軒の二つの茶室では今も毎月月釜が掛けられるなど当宮とお茶は切り離せない関係にある。毎年十二月一日の当宮献茶祭は、こうした歴史・伝統を引き継ぐもので、明治の初めから齋行されており、今日全国の社寺で執り行われている献茶祭の嚆矢といえるものだ。



北野大茶湯址碑



境内に残る太閤井戸

北野大茶湯図 浮田一蕙筆



畑正高氏・鈴鹿且久氏・大倉治彦氏・長谷幹雄氏・山本源兵衛氏ら献茶祭保存会役員による口切式

日和の好天であり、多くの参拝者が見守った。本殿到着後、茶壺は神前に供えられ、御茶壺奉献奉告祭を齎行した。参列した献茶祭保存会会員や茶師・茶商らが玉串拝礼し、献茶祭の無事な齎行を祈った。

この後口切式に移り、献茶祭保存会の役員が横一列に並び、古式通り恭しく一つずつ茶壺の封を切って、色鮮やかな碾茶を茶舟の上に盛り上げ、宰領の渡辺孝史氏によって丁寧な検知が行われた。碾茶は献茶祭に使うため抹茶にされ、当日を迎えることになる。



渡辺孝史宰領による碾茶の検知



御茶壺道中

献茶祭に先立ち十一月二十六日、祭典で使用される抹茶の原料、碾茶が産地から運び込まれ、神前に供えられる御茶壺奉献奉告祭・口切式が古式に則り齎行された。

碾茶は、由縁により木幡・宇治・菟道・伏見・桃山・小倉・八幡・京都・山城などの各茶師・茶商によって奉献されるもので、この日午前十時四十五分、産地ごとに茶壺に入れられた碾茶は、紺色の着物・茜だすき・姉さんかぶりの茶摘み娘の先導による御茶壺道中によって、一の鳥居前から本殿まで運び込まれた。この日は小春

御茶壺奉献奉告祭・口切式も古式ゆかしく



神前に献上された各産地の御茶壺



上七軒西方尼寺に残る千利休居士が用いた井戸



御神前で御奉仕される表千家不審菴千宗員若宗匠



玉串拝礼



猶有齋千宗員若宗匠

表千家不審菴千宗員若宗匠御奉仕、
久田家半床庵の御当番による献茶祭齋行
境内の各茶席は茶人・愛好家で賑わう

こうして迎えた献茶祭は十二月一日午前十時から本殿で多数の関係者が参列し、斎行された。

神前でのご奉仕は、在洛の四家元・二宗匠（藪内家・表千家・裏千家・武者小路千家・堀内家・久田家）が輪番で行うのが習わしとなっている。本年度は久田家半床庵が当番年に当たるが、表千家不審菴猶有齋千宗員若宗匠がご奉仕され、御祭神と末社豊国神社の神前に献ずる濃茶・薄茶を各二碗ずつ謹点された。

本殿神前に濃茶・薄茶が奉られたあと、宮司が祝詞を奏上、宗員若宗匠や席主代表の佐川百合子氏、献茶祭保存会代表の畑正高氏らが玉串奉奠して本殿での祭典を終えた。

祭典の様様を映し出すモニターが置かれた本殿前西回廊の特別観覧席は、門人の人たちや茶愛好家で超満員となり、宗員若宗匠がお点前される光景を見守っていた。

本殿での祭典後、宗員若宗匠らは豊太閤を祀る豊国神社へ移動され、ここでも祭典が斎行された。

この日、社務所大広間には拝服席（半床庵）が、また明月舎には副席（半床庵社中）、社務所奥・中の間（清和会）、西方寺（佐川百合子氏）、松向軒（松向軒保存会）、上七軒歌舞練場（上七軒お茶屋組合・同芸妓組合）に各副席が置かれたほか、宝物殿前にはそば席（献茶祭保存会）が設けられ、終日門人や愛好家で賑わった。



祝詞奏上



拝服席 半床庵（社務所大広間）



副席 半床庵社中（明月舎）



豊国神社献茶祭



副席 松向軒保存会（松向軒）



副席 佐川百合子（西方寺）



副席 上七軒お茶屋組合・同芸妓組合（上七軒歌舞練場）



大勢の観覧者で賑わう会場内



本年より竣工した文道会館が会場となった



菓匠会による飾り菓子の展覧

献茶祭に協賛し、この日、京都の老舗和菓子店で組織する「菓匠会」が、例年の絵馬所から竣工した文道会館に場所を移し、飾り菓子の展示会を開いた。

「菓匠会」は、江戸時代の禁裏御用達の「上菓子仲間」の流れをくむ京都の老舗和菓子屋二十店で組織され、毎年その年の課題に沿って各店が珠玉の一品を展示し、茶とともに発展してきた京都の和菓子職人の技を披露するもの。

本年は「雪景色」を菓題とし、各菓匠が「静寂」「雪ちどり」「風花舞う」「雪の小径」など様々な題をつけて飾り菓子を展示、訪れた人たちは一点一点食い入るように見つめ、カメラに収めていた。

献茶祭に協賛
文道会館で
「菓匠会」が銘菓展開く
菓題に珠玉の一品展示



KYOTO
NIPPON
FESTIVAL

天正年間に開催された空前絶後の大茶会
「北野大茶湯」の舞台となった北野の地を会場に繰り広げられた
伝統文化とアート・食・音楽の融合する祭典

KYOTO NIPPON FESTIVAL開催

歴史舞台のもみじ鮮やか

開苑十一年目の史跡御土居「もみじ苑」

京都のもみじ名所として定着、人気益々上昇

史跡御土居「もみじ苑」が昨年十月二十八日から開苑した。十一月十一日からはライトアップも始まり、「天正の昔」の遺構である歴史舞台のもみじは、昼も夜も色鮮やかに染まり、参拝者の足は途絶えることなく続いた。開苑してからわずか十一年しか経っていないにも関わらず遠方からの団体参拝・入苑者が大幅に増えるなど京都のもみじ名所として全国的に認知される形となった。

十一月に入り、朝晩の冷え込みに合わせてもみじの色づきは日一日と鮮やかさを増し、それに合わせてもみじ狩りの参拝者は増えだした。ライトアップが始まると、夜も昼と同様の賑わいとなった。とくに二十三日の勤労感謝の日、二十五日の御縁日、翌二十六日の日曜日などは小春日和の天候にも恵まれ、「もみじ苑」の入苑入り口は、長い行列ができるほどの混み具合を見せた。

京都市内や近隣からだけでなく関東方面や遠方からの団体ツアーも多く、富山県から来た女性は「外から見た感じでは、これだけ多くのもみじがあるなんて想像もつかなかった。教科書でしか知らない御土居の遺構で豪華なもみじ狩りができて感動しました」と、感激の表情で話した。

境内が一望できる御土居展望所は人気スポットで多くの人が佇み、とくに夜はライトアップの中、幻想的な雰囲気醸し出す社殿に見入る人で混み合った。外国人の

国宝御本殿を一望 御土居展望所



にぎわうもみじ苑



新築の文道会館と紅葉



もみじ拝観者で混み合う苑内

菅公御歌
このたびは
幣もとりあへず手向山
紅葉の錦
神のまにまに



姿も多く、スマートフォンをかざしながら見事なもみじを背景に写真を撮り合う風景があちこちで見られた。前年再興された王朝文化の香りを今に伝える菅公ゆかりの「曲水の宴」の斎行（三日）、当宮から文化・音楽・食といった魅力を発信する第二回の「KYOTONIPPON FESTIVAL」の開催（十二月三日まで）のほか、この期間様々な奉納行事（24面と25面に掲載）を繰り広げたことも参拝者増に繋がった、とみられる。豊臣秀吉公が築いた御土居を整備し、約三百五十本もある樹木の色づきを参拝者に見て頂こうと、公開が始まったのは平成十九年秋から。公開に至るまでの整備、またその後の植林事業・茶室「梅交軒」の改修や舞台の延伸工事など、一貫して当宮の崇敬者組織・北野天満宮講社（会長千玄室裏千家大宗匠）の尽力によって進められた。

他のもみじの名所では見ることでできない史跡御土居のもみじとして年々人気は高まっていたが、平成二十七年JR東海の「そうだ京都、行こう。」のキャンペーン地に選ばれたことで入苑者は飛躍的に増え、そして開苑十一年目に当たる昨年、「もみじの北野」の名を不動のものにした。

苑内に「えびす庵」お目見え 北極星の縁でサッポロビール出店

もみじ苑内に十一月二十二日から、サッポロビールグループによる飲食の出店「えびす庵」がお目見えした。

苑内での酒類の販売は禁じてきたが、サッポロビールのロゴは北極星であり、当宮が北極星輝く平安京の乾（北西）に建てられた縁から、期間限定の出店となった。



頭上一面に広がる御土居のもみじ



もみじ観覧者でにぎわう老松茶店



大勢の参拝者 表参道

平安の雅を現代に講社大祭・曲水の宴斎行 和漢朗詠、白拍子舞も披露

天神信仰の一層の昂揚を祈願 千玄室会長参列の下、講社大祭斎行



玉串拝礼 天満宮講社会長千玄室裏千家大宗匠

北野天満宮講社（会長千玄室裏千家大宗匠）の平成二十九年度講社大祭が、十一月三日午後一時半から本殿で厳かに斎行された。

本殿並びに中庭の特設席に約五百人の会員が参列する中、全国三千人の会員名簿が供えられた本殿で官司が祝詞を奏上、千会長が玉串拝礼され、天神信仰の一層の昂揚と会員の無病息災・家内安全・諸願成就を祈願した。

講社大祭は一昨年まで夏に斎行されていたが、紅梅殿船出の庭の完成、千百余年ぶりに「曲水の宴」の再興に伴い、会員にこれを鑑賞して頂こうと昨年から文化の日に執り行われている。

再興二年目の「曲水の宴」も盛況 菅公ゆかりの平安の雅が参拝者を魅了

昨年、千百余年ぶりに再興された「曲水の宴」が文化の日の十一月三日午後、紅梅殿船出の庭で二回にわたって執り行われた。

一部は天満宮講社の会員を対象とするもので、開宴に先立ち千会長が「秋晴れに恵まれた文化の日に、こうした催しが古式に則り開催されることを大変有り難く存じる次第です。この曲水の宴は、文道大祖・風月本主と敬われた菅原道真公の宮中での往時を偲び、菅公顕彰の意味を込め、和漢朗詠という北野天満宮仕様で千有余年ぶりに再興させ



「船出の庭」で平安京の雅を現代に



天満宮講社会長 千玄室 裏千家大宗匠挨拶
ご参列 前列右より 冷泉為弘氏 唐橋在倫氏 田邊親男氏 糟谷範子氏
後列右より 塩尻良市氏 小石原満氏 柏原康夫氏 宮司

て頂くことになったわけです。十年後の平成三十九年には道真公の千百二十五年半萬燈祭が斎行されますが、天神信仰の益々の発揚を願い、天神さまのご加護が全国の皆様に届きますよう念願します。史跡御土居もみじ苑の整備を始め様々なことでご協力を賜っていただきます皆様方に深く御礼申し上げます」と、挨拶された。

「曲水の宴」は、歌人で専修大学准教授濱崎加奈子氏の司会・解説により進められた。まず紅梅殿上で菅公作の漢詩『花時天似醉』が雅楽の音にのせて朗々と詠じられ、白拍子も菅公作の和歌を詠じながら優雅に舞を披露した。

この後、庭内の曲がりくねった小川沿いに平安時代の装束に身を包んだ詠者の男女各四人が座ったが、今年は中学生二人も加わり注目を集めた。題は「神」「賀」「酒」「紅葉」で、詠者は上流から次々流れてくる盃

に口をつけ、男性が漢詩、女性が和歌を筆でしたためた。

出来上がった作品は、京都教育大学教授谷口匡氏、同志社大学副学長植木朝子氏によって披露され、解説が加えられたが、席を埋めた天満宮講社の会員は、熱心に優雅な催しに見入っていた。引き続き二部の一般参加者の部が行われたが、「曲水の宴」を鑑賞するのは初めてという人も多く、秋晴れに恵まれた文化の日にふさわしい催しは一年目と同様、大盛況に終わった。

中国から伝えられた「曲水の宴」は、奈良・平安時代に盛んに行われ、菅公も記録で確認できるだけでも四回、宇多天皇の宴に招かれており、その際に作られた詩文も幾つか残されている。



白拍子舞披露 上杉 遙氏・松原 史氏・石山裕菜氏



柿本遼平氏・柿本 梓氏



蜂谷宗苴氏・鷺尾華子氏



門川大作京都市長代理 平竹耕三氏・村田紫帆氏



室元剛太郎氏・石田梨花亜氏



童子(小山 桜さん・龜山 花さん・中丸ころろさん・岩本和真さん・畠山凌一さん)



朗詠 藤村正則氏・御手洗靖大氏(付物 京都雅楽会)

次第

詠者

- 一、入庭
- 一、朗詠・白拍子「花時天似酔」
- 一、流觴曲水
- 一、詩歌披露
- 一、賜禄
- 一、退庭
- 一、終納の儀

題 〈漢詩〉

「神」 門川大作（京都市長）

「賀」 蜂谷宗慈（香道志野流二十一世次期家元）

「酒」 柿本遼平（紙司柿本六代目当主）

「紅葉」 室元剛太郎（東山中学校三年生）

〈和歌〉

村田紫帆（菊乃井若女將）

鷺尾華子（服飾デザイナー）

柿本梓（令夫人）

石田梨々亜（田辺中学校二年生）

朗詠

藤村正則 御手洗靖大（付物・京都雅楽会）

白拍子

上杉遥 松原史 石山裕菜（協力・今様白拍子研究所）

読上及解説

谷口匡（京都教育大学教授） 植木朝子（同志社大学副学長）

「菅公顕彰曲水の宴保存会」

千 玄室 氏（裏千家今日庵大宗匠）

冷泉 為人 氏（上冷泉家）

冷泉 貴実子 氏

冷泉 為弘 氏（下冷泉家）

唐橋 在倫 氏（菅家）

橘 重十九 氏（北野天満宮宮司）

「曲水の宴実行委員会」

臈谷 寿 氏（同志社女子大学名誉教授）

植山 俊宏 氏（京都教育大学教授）

植木 朝子 氏（同志社大学教授）

浅井 航洋 氏（京都女子大学非常勤講師）

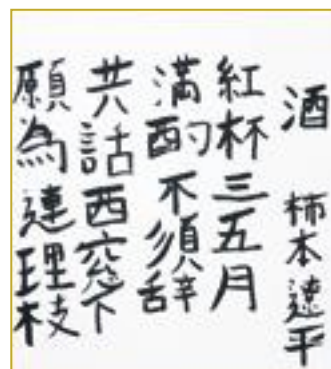
谷口 匡 氏（京都教育大学教授）

西山 剛 氏（京都文化博物館学芸員）

太田 達 氏（有斐斎弘道館代表理事）

濱崎加奈子 氏（専修大学准教授）

神原 孝至 氏（北野天満宮禰宜）



朗詠「花時天似酔」
はなのときはてんもよるがごとし

我君一日之沢。

万機之余。

曲水雖遙。遺塵雖絶。

書巴字而知地勢。

思魏文以翫風流。

（菅原道真公「菅家文章」和漢朗詠集）

【詩の意味】

「曲水の宴は遙か遠くになり、その名残も絶えてしまっている。巴という字のように曲がりくねった川で、風流韻事を好んだ魏の文帝を思つて雅な遊びを楽しむ」と、曲水の宴を再興した宇多天皇を称える詩の一節。菅公の高い教養がうかがえます。



日本文化の礎ともいえる
天神信仰の発祥地から
伝統文化・アート・食・
音楽を融合させ、その魅力を
国内外に発信する
「KYOTO NIPPON FESTIVAL」



KYOTO
NIPPON
FESTIVAL

オープニング 杏仁ショークエストラ×IKENOBOYS



門川大作京都市長、寺田一博京都市会議長、宮司出席による開会式

オープニングセレモニー

日本文化の礎ともいえる天神信仰の発祥地から伝統文化・アート・食・音楽を融合させ、その魅力を国内外に発信する「KYOTO NIPPON FESTIVAL」を、前年に続き二回目として十月二十一日から十二月三日まで開催した。

オープニングセレモニーは十月二十一日午後四時から紅梅殿で行った。神若会北野天神太鼓会による太鼓演奏で開会を告げた後、門川大作京都市長が「文化庁が京都に移転します。文化で京都を、日本中を元氣するよう取り組みたい」、また、宮司も「天神信仰の発祥地から文化の発展に尽くして

いきたい」とそれぞれ挨拶。
引き続き杏仁ショークエストラが奏でる楽曲をバックに池坊・IKENOBOYSによる「いけばなパフォーマンス」などが行われた。絵馬所では、京都吉兆特製の限定スペシャルメニューの生湯葉ぜんざいの店が出店した。



オープニング FM802 公開収録「Beautiful Harmony」

メイン企画

永島千裕個展「神のまにまに」 企画展「乃木坂46 伊藤万理華の脳内博覧会」

今回のフェスティバルのメイン企画として十月二十一日から十二月三日まで永島千裕個展「神のまにまに」と乃木坂46「伊藤万理華の脳内博覧会」を竣功したばかりの文道会館で開催し、期間中鑑賞者で賑わった。永島氏は京都嵯峨芸術大学出身の新進の現代美術家。京都では七年ぶりの個展であり、「神のまにまに」というタイトル通り当宮にまつわるエピソードやモチーフを彼女らしいファンタジー溢れる世界観で描いた新作が並んだ。現代美術と天神さんという異色の取り合わせだけに、彼女の世界観を知ろうと作品の前にじっとたたずむ入場者もいた。

女性アイドルグループ乃木坂46のメンバーである伊藤万理華さんによる「伊藤万理華の脳内博覧会」は、



乃木坂 46「伊藤万理華の脳内博覧会」会場



永島千裕 個展「神のまにまに」会場

期間中、数回にわたり華道家元池坊による「いけばな教室」や松栄堂による「聞香」、立命館大学による「漢字体験教室」を開催。各教室では参拝者が日本文化の神髄に触れようと、真剣に取り組んでいた。

「いけばな」教室は、神楽殿などで池坊の若手教師によつて行われ、いけばなの源である池坊の歴史が語られた後、ガーベラやバラなどの花を使って自由花で生けさせる指導が行われた。また明月舎での「聞香」は、小さな香炉を使って五種の香木を焚き、香りの違いを楽しんだ。池坊でいけばな修業をしているという中国女性性は「聞香は素晴らしい体験だった」と満足そうに話していた。

松向軒での「漢字体験教室」では、印章によく使われる小篆（しょうてん）と呼ばれる古代文字を使つてのハンコ作りや缶バッジ作りに取り組んだ。いずれも簡単に自分だけのハンコができるとあつて受講者の反応も上々。「こうした機会を通じて漢字に親しんでもらえればうれしい」と、主催者側では話していた。

ワークショップ 「いけばな」「聞香」「漢字体験」



永島千裕氏 描き下ろし作品

ファッション・アート・カルチャーなど多岐に広がる彼女の興味を独自の世界観で表現した企画展。会場には彼女が歌う映像が流れ、壁面には様々なポーズをとった写真や着用した衣装が展示された。

入場者は圧倒的に若者が多く、写真を一点一点食い入るように見つめていた。関連グッズを一人で何点も購入する若者もあり、モデルとしても活躍している彼女の人気の高さを見せつけた。

また十一月十一日には、永島千裕氏と伊藤万理華さんがそれぞれの作品などについて語り合うトークショーも行われ、満員の会場をわかせた。



グッズ売場に並ぶ大勢のファン



脳内博覧会の様子



永島千裕氏と伊藤万理華さんによるトークショー

京都の伝統工芸制作体験

京都伝統産業ふれあい館による「京都の伝統工芸制作体験」が十一月十一日・十八日・十二月三日の三回にわたり神楽殿で行われた。ミニ提灯づくり・京こまづくり・ミニうちわ家紋入れ・型紙彫刻体験など京都の伝統工芸品の制作に携わる職人から「ほんまもん」の技を学びながら制作体験をした。

曾和鼓堂氏による「鼓」体験とお話

能楽囃子方の小鼓奏者曾和鼓堂氏「重要無形文化財能楽（総合認定）保持者」による講座が十一月二十六日、午前と午後の二回にわたり明月舎で行われた。「曾和鼓堂・小鼓で天神さんを囃す」という催しで、参加した人たちに実際に鼓の打ち方を指導し、鼓の魅力についてユーモアを交えながらわかりやすく解説した。最後に曾和氏は「ピンチに陥っている日本の伝統文化に関心を持って下さい」と呼びかけた。

写真家水野克比古氏・秀比古氏と撮る 北野天満宮の紅葉

京都を代表する写真家水野克比古氏、水野秀比古氏による写真講座が十一月二十一日午前八時より開かれた。約三十名の参加者たちは開苑前のもみじ苑で、水野両先生の撮影アドバイスを受けながら美しく色づいた紅葉にゆつくりとカメラを向けていた。

音楽LIVEステージ 中孝介&黒澤有美コンサート

中孝介のコンサートが十一月十八日、紅梅殿で行われた。和服姿で登場し、箏奏者の黒澤有美とのコラボもあり、独特のやさしい歌声が聴衆を魅了した。

日本の食文化を発信

十一月二十五、二十六の両日、もみじ苑内に京都吉兆による「担々麺」の店が開店した。総料理長の徳岡邦夫氏が京都の食材にこだわって考案したこのフェスティバルだけの限定メニューであり、両日とも順番待ちの客が並ぶなど大好評だった。



松栄堂 お香体験



池坊 いけばな体験



曾和鼓堂 小鼓体験



京都伝統産業ワークショップ



会場となった文道会館



立命館大学 漢字体験



猿まわし



京都吉兆のフードブース（御土居もみじ苑）



ZEPPライブ 中 孝介・黒澤有美

北野天満宮の新春の祭典・行事 〈一月～二月〉



一月一日

歳旦祭



新年最初の神事。午前七時から宮司以下神職により本殿で斎行し、年頭に当たり世界の平和・国家隆盛・皇室並びに氏子崇敬者の弥栄を祈願する祭典。

◆初詣

受験祈禱や年始に際しての家内安全・厄除などの祈願が非常に多く、学業のお守をはじめ、お札・絵馬などを受ける受験生やその家族で社頭は大変混雑し、特に新年招福の天神矢や千支の一刀彫等の正月の縁起物は、参拝者に喜ばれている。

一月二日

筆始祭並びに「天満書」奉納



午前九時から本殿で御遺愛の硯などを整え、書道の神でもあった菅公の御神徳を偲び、この日から神前書き初め「天満書」を始めることを奉告する。

「天満書」は、絵馬所で四日まで行われ、子どもたちが書道の上達を願って力強く書き初めをし、作品を奉納する。これに家庭で書き、奉納された作品を加え、例年約四千点が、十九日午後一時から二十七日午後三時まで西廻廊で展示し、展示初日には書家の先生らによって審査が行われる。



一月二日まで

献華展 華道家元池坊 京都支部

華道家元池坊京都支部による新春を彩るいけばなの奉納。元旦から神楽殿で開催され、立花・生花・自由花の形で生けられた正月らしい生け花が初詣参拝者の目を楽しませる。



一月三日

新春奉納狂言

新春奉納狂言が午後一時から神楽殿で、茂山忠三郎師と猿楽会によって行われる。



一月五日

そろばんはじき初め

北野天満宮そろばんはじき初め奉賛会に集える小中学生約四百人が御本殿参拝後、午前十時から絵馬所にて、そろばんの上達を願ってはじき初めを奉納する。長さ五・五メートル、四百桁もあるジャンボそろばんが毎年話題となる。



一月二十五日

初天神

一年で最初の御縁日であり、表参道を始め境内周辺は、多くの露店が並び、ひときわにぎわう。

特に一月二十五日は初天神と呼ばれ、新春一番の天神さんの日として、京阪神はもとより全国の人々に親しまれている。毎年多数の参拝者が訪れるとともに、すでに受験シーズンに入っており、本殿前や牛社の前は、若者の行列ができる。表参道を始め境内周辺は、多くの露店が所狭しと軒を連ねる。



二月三日

節分祭と追儼式

一月五日まで 楼門に西陣系人形

西陣織工業組合協賛による系人形の展覧。西陣のつくりもの人形「系人形」が楼門内側左右に展示される。西陣織工業組合の依頼により、毛利ゆき子西陣和装学院学長の監修指導のもと、同学院と西陣連合青年会が毎年テーマを変えて制作する。



午前十時から本殿で節分祭を斎行し、一年間の災厄を祓った後、午後一時から神楽殿で茂山千五郎社中による伝統の「北野追儼狂言」が奉納される。上七軒歌舞会の芸舞妓による日本舞踊の奉納もあり、最後に出演の狂言師と芸舞妓が神楽殿の上から威勢よく豆をまく。当宮は京都の「乾（北西）の隅」の守り神として創建されて以来、災難除け・厄除けの社としても篤い信仰があり、節分には「四方詣り」と称して当宮など四社寺を参拝して無病息災を祈る習慣が根付いている。

二月二十五日

梅花祭

九百有余年の歴史ある祭典



菅公の祥月命日に当たる二月二十五日午前十時から本殿で梅花祭を厳肅に斎行し、御祭神の御遺徳を偲ぶ。神前には七保会の会員が調製した「梅花の御供」「紙立」という二種の特殊神饌が奉饌される。また、貞明皇后御参拝の古例により宮内庁京都事務所長が皇后陛下の御代拝として参向される。

境内では美しく咲いた梅花の下、上七軒歌舞会の女将・芸舞妓らの奉仕により「梅花祭野点大茶湯」を催し、公開中の梅苑を含め境内は参拝者で大賑わいとなる。



三月二十五日

梅風祭

崇敬者団体梅風講社の祭典である梅風祭を午後三時半から本殿で斎行する。

梅風講社の更なる隆盛と講社員の無病息災を祈願し、白衣・緋袴を身にまとった「八乙女」が鈴舞を優雅に奉納する。



齋行された神事 (十一月、十二月)

一條天皇行幸始祭

一條天皇行幸始祭を十月二十一日午前十時から本殿において厳かに齋行した。
寛弘元年（一〇〇四）、一條天皇が初めて当宮へ行幸された日を寿ぐ祭典で、宮司が祝詞を奏上し、皇室の弥栄・国家の安泰を祈願した。

行幸始祭



大闘茶会



第九回北野大闘茶会開催

第九回北野大闘茶会（京都市茶業組合・京都市茶業青年会主催）が十月十五日、絵馬所で開催された。闘茶は、名前を隠したお茶を飲み比べ、茶の種類を当てるといいう南北朝時代、京都の文化人の間で流行した優雅な遊び。今年は台湾からやってきた女性もおり、六十人が参加した。参加者は玉露・煎茶各二種類、粗茶一種類、計五種類のお茶を三回ずつ、香りをかぎながら神妙な顔つきで味わい、お茶の種類を紙に書き込んでいた。

一位の北野天満宮賞を受賞したのは京都市右京区の男性で、二位はその夫人、幼稚園児の長女も特別賞という家族ぐるみの受賞が話題を呼んだ。



「去年の今夜清涼に待す」
菅公偲んで余香祭

古式ゆかしく献詠歌披露式

『重陽後二日』の名詩をつくられた菅原道真公を偲ぶ余香祭を、十月二十九日午後二時から本殿で齋行し、引き続き恒例の献詠歌披露講式を古式ゆかしく執り行った。

余香祭

菅公は、右大臣の位にあつた昌泰三年（九〇〇）九月、清涼殿での重陽の宴に召されて詩を詠まれ、感銘された醍醐天皇から御衣を賜った。一年後配流先の大宰府でその栄華を追想され「去年の今夜清涼に待す 秋思の詩篇 独り腸を断つ 恩賜の御衣今茲に在り 捧持して毎日常香を拝す」の名詩『重陽後一日』をつくられた。余香祭は、この故事にちなむ祭典で、久しく途絶えていたが、大正八年、重陽の節句（旧暦九月九日）を新暦に換算して旧儀を再興、以来毎年この日に齋行されている。

献詠歌披露講式は、この日の恒例行事。全国から寄せられた献詠（今年の兼題は『雲』）の中から濱崎加奈子氏（歌人・公益財団法人有斐斎弘道館館長）が十三首を選び、車座になった向陽会（冷泉為弘会長）会員ら六人が綾小路流の独特の節回りで古式ゆかしく詠みあげた。神前には白と黄色の菊花が供えられ、神職・向陽会員らは烏帽子に小菊をかざして奉仕した。



五穀豊穣に感謝
新穀供え、厳かに新嘗祭斎行



五穀豊穣に感謝する新嘗祭を十一月二十三日午前十時から本殿で氏子崇敬者ら約六十人の参列の下、厳かに斎行した。

新嘗祭は、天皇が新穀を天神地祇に供えて五穀豊穣に感謝する飛鳥時代からの祭儀であり、現在も宮中の重要祭祀として続けられており、当宮でもこれに合わせ、毎年この日に斎行している。神前に今年収穫した稲穂や米、醸造されたばかりの白酒、海や山の幸を献じ、宮司が祝詞を奏上、四人の巫女が「紅わらべ」を舞い、豊作に感謝し、氏子崇敬者の家内安全・家業繁栄を祈願した。

新嘗祭

七五三詣で華やぐ境内

十月から十一月末にかけて境内は七五三詣の親子連れの参拝者で賑わい、華やいだ雰囲気包まれた。

七五三詣のピークは例年通り十月の終わりごろからで、とくに土曜・日曜日や祝日は親に伴われた羽織・袴、振袖姿の子どもたちで賑わい、境内は華やぎを見せた。

昇殿参拝してご祈禱を受けた子どもたちは、千歳飴の授与品を手にはやしやぎ。親や参拝者が向けるカメラに向かって、少し恥かしそうにポーズをとる風景があちこちで見られた。



七五三詣



◆平成二十九年余香祭献詠披露選歌「雲」

心にも雲のかかりし日もありて

涙の雨も夕立となる

もれ出づる雲間の月の影さえて

小萩がもとぞ 白玉となる

西海の八十島越えてなつかしき

香をだに遺こせ 雲の梯

鱗雲 茜に染まり 錦なす

空眺めつつ 鍬片付ける

少少の肺のくもりも老いてしに

仰ぐ秋空 白雲一つ

雲晴れぬ ことなしといふみことばを

また唱へたり 朝に夕なに

ひんがしの都につづく空遠く

流るる雲に 思ひ託せし 賀茂御祖神社権禰宜 田中明仁

秋風もおだしき都 澄み渡り

はるけき空に 豊旗の雲 八坂神社権禰宜 仲林亨

神殿の空おほふ雲 天津風

祭りの程は 吹きはらはなむ 神田神社宮司 平野修保

あしもとに せまる雲海 富士登山

六十年経しも 褪せぬ 思ひ出 御霊神社宮司 小栗栖元徳

朱ころの あけて秋めく ひかり添ふ

にしきの杜の 天の八重雲 向陽会会長 冷泉為弘

大神の 望郷の念 星となり

雲居にかがよふ 七夕の宵 北野天満宮宮司 橘重十九

平成三十年 献詠兼題

一月 語 二月 東風 三月 曲水

四月 蓬 五月 磯 六月 兆

七月 雷 八月 あかつき 九月 琴

御旅所 歩 十月 浅茅 余香祭 結

十一月 芒 十二月 曆

大福梅の授与

大福梅は、当宮境内の約千五百本の梅の木から取った梅の実を塩漬け・土用干しにしてしたもの裏白を添え、奉書紙に包んだもので、当宮ならではの縁起物として親しまれている。授与所には、「大福梅をいただいて家族の無病息災を祈るのが正月の習わし」という参拝者の行列ができた。またこの日から、楼門に掲げられた戌の大絵馬を小型にした干支絵馬の授与が枚数限定で始まっており、大福梅と合わせて求める参拝者も多く、授与所は一足早く新春のムードが漂った。



事始め — 大福梅の授与始まる

迎春準備
整いました

元旦の祝膳に使われる大福梅の授与が十二月十三日の事始めから始まった。

大福梅は、元旦の祝膳で白湯や初茶の中に入れていただき、邪気を払って一年間の健康を祈る縁起物。平安時代、村上天皇の御代の天暦五年（九五二）に疫病が流行、天皇も罹患されたが、このお茶を飲んで平癒された、という故事にちなんでいる。



初詣参拝者の応接に当たる正月巫女奉仕者の研修会が十二月九日午後、新装なった文道会館で行われ、約百三十人の学生が神職から接遇の仕方などについて学んだ。正月を前に毎年この時期に行っており、文道会館に参集した学生は、

まず白衣・緋袴の巫女姿となり、本殿に正式参拝してお祓いを受け、初詣参拝者の応接が無事務められるよう祈った。社殿や境内の説明を受けた後、文道会館に戻って研修が行われた。当宮の由緒をまとめたDVD観賞や参拝者に授与するお守りやお札の種類・概要などについて説明を受け、受け渡しをする際の心得についてもみっちり指導を受けた。正月には、授与所などでたくさん参拝者と触れ合う重要な役割だけに、参加した学生は終始真剣そのものだった。

巫女研修



巫女の心得、習得しました — 新装の文道会館で正月巫女奉仕者の研修会

大絵馬



「文道大祖 風月本主」の扁額が掛かる楼門に、来年の干支の戌（いぬ）を描いた大絵馬が十二月五日午後、神職らによって取り付けられた。

この戌の大絵馬の原画は、例年通り日本画家の三輪晃久画伯によって描かれた。絵馬は無垢材のヒノキで造られ、幅三・三メートル、高さ二・二五メートル、厚さ三・五センチ、総重量百二十キロという大きなもの。足場を組み、三輪画伯が見守る中神職・宮大工ら十人掛かりで取り付けけた。師走初旬ながら新春の香漂う取り付け作業を参拝者が「もう、正月なのね」と、感慨深そうに見つめていた。



楼門に「戌」の大絵馬奉掲 — 重さ百二十キロ、正月の香漂う

もみじ鮮やか 奉納行事多彩 史跡御土居「もみじ苑」賑わう

史跡御土居「もみじ苑」が十月二十八日（十一月十一日よりライトアップ）から十二月七日まで開苑され、多彩な奉納行事が繰り広げられ、昼も夜ももみじを愛でる参拝者で賑わった。

上七軒の舞妓さん 日本舞踊奉納

上七軒の舞妓さんによる日本舞踊の奉納がライトアップ初日の十一月十一日夕、紅梅殿で行われた。三人の舞妓さんが「もみじの橋」「重ね扇」「京の四季」の三曲をあでやかに舞い、もみじ狩りの参拝者の目を楽しませた。



オカリナと ギターの共演

ギター奏者阿武野逢世さんの弾き語りとおカリナ奏者鈴江先子さんの演奏会が十一月十二日夕、紅梅殿で行われた。二人がソロとコラボで菅公作の和歌などを披露し、参拝者の耳を楽しませた。



京都連歌の会 「もみじ連歌会」



京都連歌の会の「もみじ連歌会」が十一月五日紅梅殿で行われた。

当宮は、中世から江戸時代にわたり連歌会所が置かれ、連歌会が盛んに張行されてきた連歌ゆかりの神社。同会による「もみじ連歌会」は、春の「梅ヶ枝連歌会」とともに恒例となっている。この日は「賦何人連歌」で詠んだ作品を奉納した。



同志社女子大学の 演舞奉納

同志社女子大学の「京炎そでふれ！花風姿」の演舞奉納が十一月二十三日午後、紅梅殿前で行われ、約二十人の学生が威勢のよい演舞を披露した。



奉納連歌

平成二十九年十一月五日

於 北野天満宮 紅梅殿張行

賦何人連歌

初折 表

宮もみぢ八棟に映る手向かな 宮司 重十九
月ぞ照らさむ通ふ下道 和伸
水音は行く瀬や速みさやけくて まり絵
ひかりも岩も砕くさび鮎 孝子
さま変へて山山はけふ眠りたる 稔
時雨るる中の関と梯 幸子
国遠く在りと野風よ吹き返せ 光代
片薫物を空に合はする
初折 裏

ここのへにきほひし袖も畳みおき 博介
ゆらと木末を落つる螢火 そよ子
なかなか秘むれば思ひ滅えやらぬ 和行
尉も底には燠ぞありける 満千子
若き日は君が心をはかりかね 節子
海をへだてて思ふふる里 博介
雨晴るる苦屋の煙はてもなし 和行
泣きやみてより唱ふわらんべ まり絵
身に入むや人の世も亦かくもあれ 武彦
いくたび瘦せて月の円かぞ 和伸
雁のそのひとつだにふりむかず まり絵

北野天神 もみじ寄席

露の五郎兵衛一門会による「北野天神もみじ寄席」が十一月十八日、社務所大広間で開かれた。露の湊都・陽照・新幸・棗・眞・吉次・団六・団四郎・都の一門九人の落語家が一席伺い、満員の会場を爆笑に誘った。開演に先立ち境内にある初代露の五郎兵衛碑の前で出演者が参列して碑前祭が斎行され、一門の益々の隆盛を祈った。



三大学学生の アンサンブル

京都工芸繊維大学・京都府立大学・京都府立医科大学の学生による管楽器や弦楽器の合同演奏（アンサンブル）が十一月二十六日夕、紅梅殿で行われ、美しい音色が参拝者を魅了した。



北野天神太鼓会の和太鼓奉納 仁和・翔鸞両校児童とも共演



神若会北野天神太鼓会の和太鼓奉納が十一月十一日夜、紅梅殿で行われた。かがり火がたかれる中、同会が指導を行ってゐる仁和・翔鸞両小学校の和太鼓クラブとの共演もあり、勇壮な太鼓の音が参拝者を引き付けていた。北野天神太鼓会による和太鼓奉納は、十八日、二十五日にも行われた。

古武術の演武奉納

当宮への参籠祈願が endpoints となって流が創設された天神真楊流柔術を始め浅山一伝流体術・甲源一刀流剣術・正木流万力鎖術の古武術四流の演武奉納が十一月二十五日午後、紅梅殿で行われ、激しい気合をかけながらの古武術の技が参拝者の目をくぎ付けにした。



露を連らぬる若草の上
まほろばは花ひろびろとうつくしき
檜の笠に桜見せばや
博介 武彦 稔

名残折 表

朝ごとの鐘にかはれる蟬の声
何を急ぎて時過ぐすらむ
しくは無しけふの一ト日の樽の酒
海のむかうは葡萄色して
外ッ国の大殿や姫やうち詣で
芝草の坂毬はころがる
砂深く動かぬ足を如何にせむ
さしのぶる手に恋なつのりそ
明けてなむ近劣りするきぬぎぬに
逢はむと走る霜白き道
朽ち残る荒垣のみの君が宿
われからもえてきつねばな咲く
月照らすごんしやんごんしやんなし泣くろ
心せはしき虫の声声
和行 稔 満千子 幸子 武彦 宣行 まり絵 博介

名残折 裏

秋風にひねもす跳ねて猿まはし
旅から旅の身も哀しまで
いただきに立ちて思ひを新たにす
白き米むす村の四つ辻
古くより家に伝はる宝あり
雛の笑みにゆかし笛の音
咲き誇る五百枝の花や宮の齋庭
水も融けて船出だす比
節子 幸子 和行 満千子 武彦 博介 まり絵

句挙

重十九 一句 稔 四句 和行 五句
和伸 二句 幸子 三句 満千子 四句
まり絵 六句 光代 三句 節子 三句
武彦 五句 博介 五句 宣行 一句
孝子 一句 そよ子 一句

神若会北野天神太鼓会十周年

新装の文道会館で 柿落としての記念演奏会、 二日間で五百人聴き入る



およそ250名の来場者を前に渾身の十曲を披露

神若会北野天神太鼓会（竹内勤会長）の十周年を記念する演奏会が竣功したばかりの文道会館で十月十四・十五の両日にわたって行われ、二日間で五百人以上の参拝者が熱のこもった演奏に聴き入り、盛んな拍手をおくった。

北野天神太鼓会は、日頃紙屋川の清掃など神社の奉仕活動を行っている当宮崇敬者の若者ら数人で結成されたが、現在では総勢五十人を数える大所帯となった。毎月二十五日の縁日や祭事・催事における奉納演奏を始め地域の行事に招かれての演奏、さらには仁和・翔鸞両小学校に向いての和太鼓指導など活動の輪を広げている。

十周年の記念演奏は文道会館の柿落としに加え、支えて頂いた参拝者へのお礼の意味を込めて開いたもので、初日の十四日は、外国人観光客を含め二百人以上の入場者で超満員の中、約二十人の太鼓会会員が「天」「勇駒」「祝い太鼓」「昇竜天舞」など計十曲をバチさばきも鮮やかに演奏した。

途中、演奏にも加わった当初からのメンバーの一人、寺田一博京都市会議長は「手作りですやってきた会が十周年を迎え感無量です」と挨拶した。また、竹内会長は「十年の間、地域の大半の祭りに出かけて演奏したおかげで、名前が知られるようになった。十年は通過点であり、二十周年に向かって頑張っていきたい」。発足以来の太鼓の指導者、野々口匠師範は「他の太鼓チームと比べて練習量が少ない中、みんな一生懸命練習を続け、負けない演奏ができるようになった」と、それぞれ挨拶した。

会場では、設営された大型のモニターで、会の活動のスライドが映し出され、入場者は時折それに視線をおくりながら演奏に聴き入っていた。

二日目の十五日の公演後、会員は昇殿参拝し、宮司から感謝状が贈呈された。



感謝状贈呈



神若会北野天神太鼓会



満員御礼の会場



感謝の気持ちをこめて

「国宝北野天神縁起絵巻」を十五年ぶりに公開 宝物殿で京都非公開文化財特別公開展開く



連日多くの拝観者を魅了した非公開文化財展

公益財団法人京都古文化保存協会の「第53回京都非公開文化財特別公開展」が十一月一日から十二日まで宝物殿で開催され、とくに「国宝北野天神縁起絵巻」（承久本）が、十五年ぶりの公開となり、拝観者の人気を集めた。

公開されたのは長い絵巻の中で、第四巻第二段の「菅公西下船出の場」と第五巻第四段の「清涼殿落雷の場」。大宰府へ左遷される菅公の一行が舟で苦海へと漕ぎ出す場面、清涼殿に落ちかかるうとする雷神に向かって抜刀する時平の姿を描いたところで、いずれも絵巻の中でも著名な場面である。

拝観者は、解説を読みながらうなずきあい、「鎌倉時代の絵巻とは思えないほど色が鮮やかですごい」などと言いながら食い入るように見入っていた。案内に当たっていた同志社大学二回生の女子学生は「素晴らしい絵巻で、案内しながら大変勉強になります」と話していた。他に長谷川等伯筆の「弁慶昌俊相騎図絵馬」（重文）なども公開された。

京都非公開文化財特別公開展は、「宝刀展Ⅷ」（十月二十一日～十二月三日まで）と併催の形態をとっており、「髭切」など重文五振の太刀などおよそ四十振の刀剣展示もそのまま、天神縁起絵巻と宝刀という当宮の信仰の多面性を見せるものとなった。



15年ぶりに公開 北野天神縁起絵巻〈承久本〉



昌俊弁慶相騎図絵馬 長谷川等伯筆（重文）

京とうふ「藤野」奉納 折り畳み茶室
 社務所で「天神囲」茶席として初披露



当宮門前町に本店を構える「京とうふ 藤野株式会社」（藤野清治代表取締役）は、一昨年春創業五十周年を記念して茶との縁の深い当宮に折り畳み茶室を奉納されたが、その茶室を「天神囲」と銘打ち十一月十三日、社務所大広間

で茶席を設けて初披露した。

この日の茶席は、藤野社長のお茶の師である表千家の松本英樹宗匠が亭主になって開かれた。茶席には渡唐天神を描いた幕末の禅僧・仙涯義梵の軸が掛けられるなど当宮仕様となった。案内を出した人ばかりではなく通りがかりの一般参拝者も客になって座るなど賑わった。お点前の間には松本宗匠が「秀吉公が朝鮮出兵の折には滞在地の博多の津にて、利休の好みで書院広間の中に簡易な茶席を造り、高麗囲」と呼んで武将が一服を楽しんだ。ここは天神さんなので「天神囲」として、解説を加えた。藤野社長は「奉納以来、少し間があいたが、こうしてお披露目させて頂き、天神さんの地元に住んでいるものとして大変うれしく」と話されていた。



台風二十一号により、重要文化財廻廊の
 檜皮葺御屋根破損、境内各所に甚大な被害

千百二十五年半萬燈祭に向け、ご奉賛広く募る



被害を受けた檜皮葺の御屋根



九月十五日の台風十八号及び十月二十二日、二十三日にわたり日本列島を横断した大型台風二十一号により、国宝御本殿の廻廊南の檜皮葺御屋根が一部破損するなど境内に甚大な被害が及んだ。

被害は境内全域に見られ、燈明舎の倒壊、末社伴氏社の社殿及び鳥居には幹半ばで折れた樹木が覆いかぶさり石燈籠が倒壊した。史跡御土居や北野大茶湯の舞台となった楼門参道松原付近では大枝が落下し、大木が折れるなどの被害を被った。

このような事態に対し、被害翌日には京都府・京都市文化財保護課が来社し、被害状況を確認。とくに三光門両側の重要文化財廻廊の檜皮葺御屋根については被害が大きいため、行政等の連携のもと、今年度中には修復作業に入ることとなった。神社としては、創建以来守り伝えてきた境内を速やかに復旧させ、来る千百二十五年半萬燈祭に向けて、社殿・境内整備を進める予定であり、氏子崇敬者各位には本事業に何卒格別のご賛同を賜り、ご奉賛をお寄せ頂きたく茲にお願い申し上げます。



樹木が覆いかぶさった末社伴氏社



倒壊した石燈籠



祭事暦（1月1日～3月31日）



[1月]

1日	午前7時	歳旦祭（中祭式）
2日	午前9時	筆始祭 天満書（午前10時） 神前書初め（4日まで） 家庭書初め（5日まで受付）
3日	午前9時	元始祭
	午後1時	奉納狂言 猿楽会・茂山良暢社中
7日	午前9時	若菜祭
9日	午前10時	摂社白太夫社例祭
14日	午前9時	末社伴氏社例祭
15日	午前10時	月次祭 御粥祭 成人祭
25日	午前9時	月次祭
	午後4時	夕神饌 初天神
27日	午後3時	書初め「天満書」授賞式

[2月]

1日	午前10時	月首祭
3日	午前9時半	節分祭
	午後1時	北野追儺式 追儺狂言 茂山千五郎社中 日本舞踊 上七軒歌舞会奉納 豆撒き
4日	午前9時半	霞祭 地主社霞祭
7日	午前10時	末社稻荷社 初午祭
11日	午前9時半	紀元祭
15日	午前10時	月次祭
24日	参籠	
	午後4時	梅花祭前夕饌
25日	午前10時	梅花祭（中祭式）
	午後4時半	夕神饌
	午前10時	野点茶会 上七軒歌舞会奉仕

[3月]

1日	午前10時	月首祭
12日	午前10時	摂社老松社例祭 摂社福部社例祭
14日	参籠	
15日	午前10時	春祭（大祭式）
21日	午前10時	春季皇霊祭遥拜式 摂末社 春季祭
25日	午前9時	月次祭
	午後3時半	梅風祭 八乙女舞奉納
	午後4時半	夕神饌
27日	午前10時	摂社宰相殿社例祭



月釜献茶（1月1日～4月30日）



[1月]

1日	献茶祭保存会	休会	（明月舎）
15日	献茶祭保存会	鈴木 宗博	（明月舎）
	松向軒保存会	濱 宗貴	（松向軒）
21日	梅交会	濱内 宗厚	（松向軒）
28日	紫芳会	休会	（松向軒）

[2月]

1日	献茶祭保存会	藪内燕庵社中	（明月舎）
11日	梅交会	村岸 宗紫	（松向軒）
15日	献茶祭保存会	中西 宗巳	（明月舎）
	松向軒保存会	上田 宗佳	（松向軒）
25日	紫芳会	鬼塚 宗節	（松向軒）

[3月]

1日	献茶祭保存会	半床庵社中	（明月舎）
11日	梅交会	晴風会	（松向軒）
15日	献茶祭保存会	官和会	（明月舎）
	松向軒保存会	寧楽会	（松向軒）
25日	紫芳会	布施 宗青	（松向軒）

[4月]

1日	献茶祭保存会	濱 宗貴	（明月舎）
8日	梅交会	未定	（松向軒）
15日	献茶祭保存会	徳永 宗住	（明月舎）
	松向軒保存会	杉山 宗喜	（松向軒）
22日	紫芳会	紫芳会	（松向軒）

菊の花を御神前に献花

岩下友行氏、小林浩氏

京都菊友会会長岩下友行氏と京都菊栄会会長小林浩氏が、本年も丹精込めて育てられた見事な菊の花を御神前に献花された。



天神さん 思い出写真館

九十年前の御茶壺道中の写真である。七ページの道中写真と見比べて頂きたい。茶摘み娘の姿こそないが、現在とそんなに変わらない行列で茶壺を入れた唐櫃が運ばれている。
ただし昭和三年三月二十六日の撮影。十二月一日の献茶祭とは別に千二十五年半萬燈祭の献茶式に向け、茶壺が献納される風景なのだ。
記録を紐解くと「各宗匠こぞって献茶式を奉仕することを決定したるを以て、之に先立ち三月二十六日、宇治・木幡・大鳳寺・伏見・桃山の製茶家及茶業組合員七十余名は御茶壺を入れたる唐櫃五基に付き添ひ当社に参入し、拝殿に於て北野会役員参列の上神職は御茶壺献納式を行ひ、終つて明月舎に於て御口切式を執行したり」とある。口切式が明月舎で行われている以外今と何も変わるところがない。
ちなみに四家元・二宗匠による献茶式が四月下旬から五月上旬にかけ、日を変えて執り行われている。



天満宮 歴史の一齣

京都大学名誉教授

藤井 譲治

「社頭古絵図」

― 神前左右の男女 ―

「社頭古絵図」には、五〇人もの人物が描かれている、その中であつて、とりわけ高貴な二人の男女の姿が、中央の天神様の像の前、階から降りた齋庭の左右にみえる。

階の左の男は、折烏帽子をかぶり脇差しを指し、後ろに太刀を持たせた従者と童子とを従えている。階の右の女は、市女笠を地に置き、後ろにいる侍女と話しているようだ。

この二人の男女が、御宮の中央の齋庭に描かれ、また天神様を頂点とする三角形の底辺左右に、二項対立的に描かれていることは、天神様を除けば、この二人がこの社頭図の中心人物と目され、また両者が夫婦であることを思わせる。さらにいえば、この社頭図を描かせたのは、この二人ではないか。

この二人の男女は、誰なのか。また何を目的にしたものか。西山克氏は、男を室町幕府四代將軍の足利義持、女をその御台、日野栄子とし、その目的を子授けだろうとされている。

西山氏が、こうした結論に達するには、緻密な論証によるが、ここでは、その核心となるいくつかの点をあげておこう。

三代將軍足利義満は、御産の祈禱を北野社に限り、他社には許さず、その後まもなく生まれながら義持であり、跡継ぎの誕生を悦んだ義満は、北野社神輿の造替、回廊等の修理を命じて

おり、北野社と將軍家の御産祈禱は、深い結びつきがある。

義持には、若くして死去した男子があつたが、その後は子を授かるために神仏に祈つたものの、子に恵まれず、次の將軍も義持の死後に鬪取りで決められた。

当時夫婦での参籠はきわめて珍しいものであつたが、義持は、夫婦で応永三十年（一四二三）六月二十三日、応永三十二年十一月二十四日に北野社に参籠している。

この二つは、義持が子授けを強くねがつていたことを示す事象と考えられる。

「社頭古絵図」上部の五つの円相の一つに描かれた愛染明王は、室町殿の身体を守る仏であり、室町將軍家と北野社との強い絆を示すものである。



る。ちなみに円相の一つ金輪聖王は天皇である。

前号で取り上げた二俣杉、また本殿階の左右の雄鶏と雌鶏のつがい、さらに本殿階の左に鶏を追う童子、多宝塔の側に平産を祝す桂女が描かれる等々、子授け・安産の願いを強く暗示させるものである。

こうした点を踏まえると、この社頭図は、足利義持が子授け祈願のために北野社に奉納したものと考えてよいではなからうか。

西山氏の指摘にはないが、南門と鳥居との間に描かれている馬具をつけない馬は奉納された神馬、また鳥居横の松林のなかに見える馬具をつけた白馬は、祈りの主が乗ってきた馬ではなからうか。

第一回北野天満宮シンポジウム

天神信仰の成立 菅原大神から天神へ

日時 平成30年3月17日(土)
13:00~16:00 (開場12:30)

会場 北野天満宮 文道会館

申込み 事前申し込みが必要となります
(限定250名直前申込要綱をご覧ください)

参加料 2,000円 (梅苑及び宝物殿拝観含む)
梅苑拝観券

開催趣旨

平安時代の公卿・政治家・学者であった菅原道真公は、その死後、神として崇められて信仰が広まり、天神を創神とする神社は現在に至るまで全国で3万数千社に及びます。では、何故を問うように展開する天神信仰はいつ頃、どのように生まれ、広く伝わっていったのでしょうか。本シンポジウムでは、太宰府・北野という天神信仰における二大聖地の神職と一般の研究者が集い、天神信仰成立の源流を探ります。

お問い合わせ先

北野天満宮社務所
京都府京都市土庫区馬場町 31 075-463-0005 (代表)
<http://www.kitanotenmangu.or.jp>

第一回 北野天満宮シンポジウム

天神信仰の成立
菅原大神から天神へ

京都 平安京の天門

プログラム

13:00 開会
司会進行 西山 剛 (京都府立総合政策研究所 学芸員)

第一部

13:05 基調講演「天神信仰の成立」
— さまざまなる「天神」と4つの「福岡」と —
竹居 明男 (同志社大学名誉教授)

14:00 休憩

第二部

14:30 シンポジウム
コーディネーター 西山 剛 (京都府立総合政策研究所 学芸員)

「太宰府天満宮の創始と天神信仰の歴史」
司会進行 味酒 安則 (太宰府天満宮 神主)

「百年かけて誕生した北野天満大神」
パネラー 橋 泰十九 (北野天満宮 司会)

パネラー 竹居 明男 (同志社大学名誉教授)

16:00 閉会
梅苑・宝物殿拝観



全国天満宮・天神社の総本社 北野天満宮。
千有余年に亘る歴史の中で、人々の心の支えとなる「天神様」と崇められ、その信仰は「天神信仰」として、今日の日本文化の礎となっている。

平安時代の公卿・政治家・学者であった御祭神菅原道真公は、薨去後、神として崇められて信仰が広まり、天神を御祭神とする神社は北野天満宮より全国に勧請され、現在に至るまで一万余千社が鎮座している。

各時代の社会構造と相まって篤い崇敬を受け続け、列島を覆うように展開する天神信仰はいつ頃、どのように生まれ、広く伝わっていったのか。

本シンポジウムでは、北野・太宰府という天神信仰における二大聖地の神職と一線の研究者が集い、天神信仰成立の源流を探る特別企画として、昨春秋に竣工した「文道会館」を会場に左記の日程で開催する。

開催日時 平成三十年三月十七日(土)

会場 文道会館

申込み 事前申し込み制 (限定二五〇名)

参加料 二〇〇〇円

問合せ (梅苑拝観券並びに宝物殿拝観券付き)
北野天満宮社務所



管公御姓

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花
主なしとて春を忘るな

梅范公閣

平成30年2月上旬～3月下旬

◎入苑時間／午前9時～午後4時まで

ライトアップ

平成30年

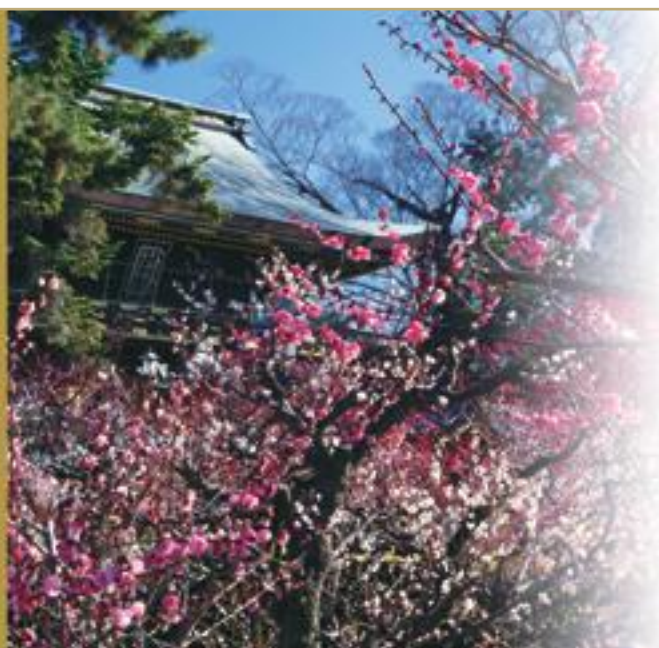
2月23日(金)～3月18日(日)の

毎週末(金・土・日)に限り公開

◎入苑時間／日没、午後9時

(最終入苑／午後8時30分)

夜乃觀梅初公開



菅原道真公の

二遺徳を偲び

梅花祭

上七軒の芸妓・舞妓による

野点大茶湯

平成30年2月25日(日)

祭典

午前10時8分 午前11時

對點茶入戶

午前10時～午後3時

管公顯彰和漢朗詠

春の

「曲水の宴」

平成30年3月10日(土)

※雨天時は、文道会館にて開催

(翌日順延なし)

【第1部】午前11時～正午

【第2部】午後1時～午後2時

紅梅殿「船出の庭」



京菓子

[illegible]

平成30年

3月2日(金)・3日(土)・4日(日)

午前10時～午後4時

北野天満宮 文道会館

京菓子コレクション

[illegible]

本ページの掲載は2017年12月31日現在、伊東市観光推進課のホームページに掲載されているものです。伊東市観光推進課 <http://www.city-ido.lg.jp/kyouka>
 企画・編集：伊東市観光推進課 広報課 編集：020-2210-1234（伊東市観光推進課） 020-2210-1234（伊東市観光推進課）



招福厄除けの社 北野天満宮の節分祭

- ◆節分特別授与品の頒布
〈初穂料〉
- 福豆の授与（三種類）
各一袋 二〇〇円
- 災難厄除箸の授与
（数に限りあり）八〇〇円
- 災難除の御札守
・銀幣の授与
- 災難除の御札
一体 三五〇円
- 災難除の御守
一体 三五〇円
- 銀幣
一体 九〇〇円

梅の枝「思いのまま」

元旦から授与

◆頒布開始 平成三十年元旦より
◆初穂料 一本一〇〇〇円
（但し、無くなり次第頒布終了）
千五十年大萬燈祭（昭和二十七年）の初天神で参拝者に授与していた経緯より、約六十年ぶりに授与を復活させた招福の梅の枝「思いのまま」。「思いのまま」には、菅公を偲ぶ梅花祭で神前に供える特殊神饌の調製に用いる厄除けの玄米が入ったヒョウタンを取りつけ、家庭に春の訪れと幸せを呼んでほしいとの願いを込めている。



紅梅殿結婚式

日本文化の発信地、 紅梅殿からはじまる家族の日

貞観元年（八五九年）菅公が十五歳の元服の折、母君は菅公の前途を祝し、『久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな』の和歌を詠み励まされました。我が国で最初に家風を表されたのが、菅公の母君であったと伝えられています。立派な家風をもった総り多い新たな家庭を築かれますようにとの願いをこめて、菅公邸宅ゆかりの紅梅殿での神前結婚式から新しい「家族」がはじまります。

御縁日 境内ライトアップ



毎月25日は天神さんの御縁日。
夜9時まで境内特別ライトアップ！

定期購読のお知らせ

- 定期購読 1,000円（1年分）
季刊・年4回発行
- 学校・教育機関でお申込みの場合は無料発送。
- お申込み・お問い合わせは、社務所まで。

今昔マップ



平安京

当宮は平安京の乾に位置し、古くより天のエネルギー、パワーの働く北野の地に祀られています。

平安京の内裏、大極殿北西に位置し三光門の真上に北極星が輝き、天子様が北極星を拝する聖なる社でした。

平安京の大極殿（遷都より600年の間）は今の京都御所の西にありました。

紙屋川、堀川に挟まれ、すぐ北西に当宮が建てられています。

- 平安京（大内裏）
- 大極殿（室町時代迄の平安京）
- 京都御所（室町時代以降）

